

## 数々のおしえ

高木文雄

おとうちゃん（と呼ばせていただきます）に身近で毎日お仕えしたのは、昭和四十九年の七月から一年間でした。おとうちゃんが大蔵大臣で、私は事務次官でした。

独禁法の改正問題が起きました。高橋俊英先輩が公取委員長で、異常な情熱で改正に取り組んでおられました。大蔵省にかかわりあるのは、銀行の關係でいどでしたが、高橋さんは、おとうちゃんならば、きつと自分の理念を理解してもらえないに違いないということで、産業界でも信頼の高い大平大蔵大臣のバックアップに期待を寄せておられました。私自身も高橋委員長のお考えに共鳴できることが少なくなかったので、おとうちゃんに問題の所在を知ってもらいたいと考え、委員長との意見交換をお願いしました。おとうちゃんは、もともと自然体を大切に「介入」を好まない人でしたから、高橋構想には気が進まないようでしたが、ゴリ（高橋俊英氏の異名）の考えは俺にはわからん、といいながら忙しい最中に三時間近く対談されました。その後曲折を経て、独禁法改正がまとまりましたが、その過程でお二人の対談があつたことを記録しておきたいと思えます。

おとうちゃんと福田先輩とではどうも肌が合わないと感じたことがあります。四十九年の暮れのことです。田中さんから三木さんへのパトンタッチがあり、福田先輩が副総理格で入閣されました。五十年年度予算編成を目前に、福田さんを議長格に経済閣僚会議が設けられました。おとうちゃんは、よけいな土俵を作るもんだ、大蔵大臣の仕事によけいな口出しをしてほしくないと、はっきり不快感を私にあらわしておられました。私が「Mセブ

ン」と名付けたこの会議での主題の一つは、各種公共料金の改訂をどう調整するかということでした。福田さんは物価に鋭敏な方ですし、おとうちゃんは物の価格は経済原則によるべきで政府が不必要に干渉すべきではないとの考えです。ただ私がおとうちゃんに同調できなかったのは、消費者米価は農林大臣、郵便料金は郵政大臣の問題であって、大蔵大臣が口出す必要があるだろうかというスタンスでした。私は公共料金問題即財政問題ですよ、がんばって下さいと申し上げて、こわい顔をされました。昨今は財政再建が政治の中心に据えられるようになりましたが、これもおとうちゃんの残された大きな遺産で、こころの種になっただろうと胸がつまります。

五十年の正月でした。たまたま休養先でお会いし、帰途車中で一緒に初省議に駆けつけました。乗り込むと早々に読書にふけっておられました。隣のぞくと各頁に赤青の側線がべったり引かれており、鉛筆を手にして一字一句を追っておられる読書ぶりにびっくりしました。題名は忘れましたが、思想書でした。読書態度のまじめさに打たれました。真理を求めている人だなという印象を受けました。

別の機会に車中で一緒にして、高松高商の学生のころ、キリスト教伝導に情熱をもちしたこと、キリスト者として生きるべく事業を興して伝導資金を集めようとしたこと、それに失敗したあと東京商大、大蔵省、政界へと進まれたことなど、ご自身の歩んだ道を語られ、「牧師さんにもなれたら、僕にはいちばん幸福だったかもしれないよ」と笑っておられました。求道者の道がこの人の真面目なんだと受けとりました。五十一年春に、三木総理から国鉄総裁をやれとお話を受けて、当時も大蔵大臣のおとうちゃんに相談いたしました。また五十五年春に、再任のお話をいただきましたときに、大平総理にご相談いたしました。二度とも「高木君、仕方ないよ、人生とはそんなもんだよ」と訓されました。おとうちゃんは、「無理をしない」「いたずらに干渉しない」「流れに沿う」「神の導きに従う」「道を求める」「ことを訓された人生の先生でした。」

(日本国有鉄道総裁)